

症例報告

食道癌術後の脾臓転移を切除した 1 例

福岡大学筑紫病院外科

長谷川修三 稲田 繁充 古藤 剛 高山 成吉
成富 一哉 関 克典 二見喜太郎 有馬 純孝

下部食道癌治癒切除術後、脾臓転移をきたし切除しえたきわめてまれな 1 例を経験したので報告する。症例は77歳の男性、下部食道癌の診断にて食道亜全摘術・リンパ節郭清術 (D2) 施行 : Lt, 1pl + IIb (中分化型扁平上皮癌), M0, pN1, pT3, pStage III であった。術後14か月、腹部超音波検査にて脾臓に2.5 × 2.1cm の低エコー腫瘍を認めた。CT, MRI, 血管造影の所見より脾臓転移の診断にて脾臓摘出術を施行した。病変は厚い被膜を有し内部に壊死を伴った4.0 × 3.5cm の腫瘍で、組織学的に中分化型扁平上皮癌であったことより、食道癌術後脾臓転移と確診した。また脾門部リンパ節には転移はみられなかったが、同部の小血管内に腫瘍結節を認め、転移経路は血行性が示唆された。術後 4 か月目に全身皮膚転移が出現。5 か月目に肺炎を併発し死亡した。

はじめに

悪性腫瘍の脾臓転移は消化器を原発巣とするものはまれである。特に食道癌術後に脾臓転移の報告した例はきわめてまれであり、転移巣を切除しえた例は本邦ではいまだ報告をみない。今回、治癒切除後、経過観察中に画像所見にて脾臓転移と診断、脾臓摘出術を行い組織学的に転移を確診できた下部食道癌の 1 例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

症 例

患者 : 77歳, 男性

主訴 : 貧血

既往歴 : 50歳時、腹部刺傷にて手術、輸血をうけた。

生活歴 : アルコールは焼酎 1 合/日、タバコは20本/日、各40年。

家族歴 : 特記すべきことなし。

現病歴 : 1996年 7 月、胆石症にて近医入院中、偶然食道癌を指摘され手術目的にて当科紹介となる。1996年 8 月19日、右開胸開腹による食道亜全摘術・リンパ節郭清術 (D2) 施行。術中腹水はなく、肝・脾に異常を認めなかった。組織学的には中分化型扁平上皮癌で 1y1, v1, ie (+), リンパ節転移は郭清リンパ節51個中、胸部下部旁食道リンパ節 (No. 110) に 1 個みられ、最終診断は Lt, 1p1 + IIb (55 × 47mm), M0, pN1, pT3,

pStage III であった。術後化学療法は施行せず、同年10月12日退院。以後、外来にて経過観察中、1997年10月、腹部超音波検査で脾臓に2.5cm 大の低エコー腫瘍を認めた。腹部 CT および腹部 MRI でも同部に腫瘍を認め脾臓転移の疑いで入院となった。

入院時現症 : 身長165cm, 体重54kg。体格栄養中等度。眼瞼結膜に貧血を認め、眼球結膜に黄疸なく、頸部リンパ節は触知せず、腹部は平坦軟で肝脾腎は触知しなかった。

入院時検査所見 : 血液、生化学、尿検査では Hb 7.6 g/dl, 血清鉄33μg/dl と鉄欠乏性貧血および CRP 1.6 mg/dl (2+) と軽度炎症所見以外異常を認めなかった。腫瘍マーカーは SCC 1.3ng/ml, CEA 1.6ng/ml, NSE 8.1ng/ml と正常範囲であった。

腹部超音波所見 : 脾臓上極に2.5 × 2.1cm 大の低エコー腫瘍を認め、内部は不均一であった (Fig. 1)。

腹部 CT 所見 : 脾臓内部の上内側に辺縁不明瞭な4cm 大の low density area を認め、辺縁のみわずかに造影された (Fig. 2)。頸胸部 CT では、頸部および縦隔内リンパ節に再発を示唆する所見は認めなかった。

腹部 MRI 所見 : 脾臓内部 (上内側) の腫瘍は T2強調像において中心部は不均一な高信号を呈し dynamic study では辺縁部からわずかに増強された (Fig. 3)。

腹部血管造影所見 : 脾動脈造影では hypovascular area として抽出され、辺縁に壁不整な血管が散見され

Fig. 1 Ultrasonography revealed a hypoechoic mass in the spleen.



Fig. 2 Abdominal CT scan revealed splenic mass 4 cm in diameter, which was enhanced only the margin.



Fig. 3 Magnetic resonance image of abdomen. T2 weighted image showed central area of the tumor.

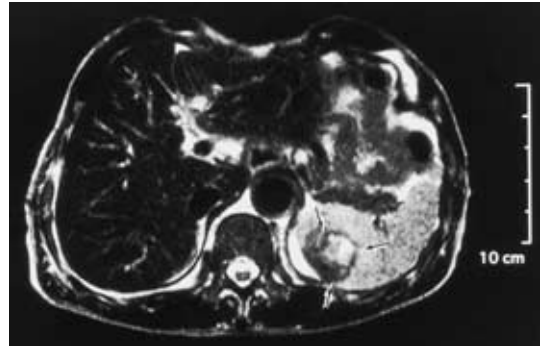
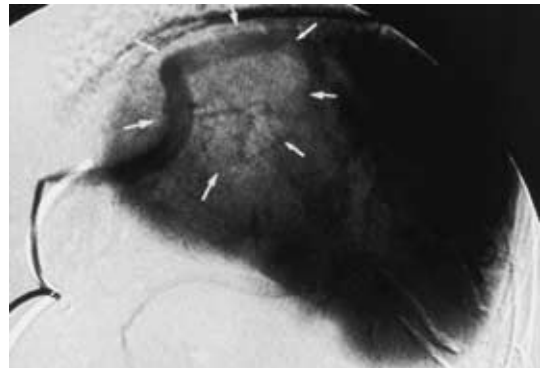


Fig. 4 Abdominal angiography, splenic arteriography showed a hypovascular lesion ()



た (Fig. 4).

以上より食道癌の脾臓転移と診断し、1997年11月10日手術を施行した。

手術所見：上腹部正中切開で開腹した。腹水、腹膜播種、肝転移を認めず。脾臓摘出術、脾門部リンパ節郭清術を施行した。切除標本で腫瘍は4.0×3.5cmで脾臓上内側に位置し脾臓表面に白色調変化を認めた。剖面では厚い被膜を有し内部は壊死に陥っていた (Fig. 5)。

組織学的には中分化型扁平上皮癌で郭清したリンパ節に転移は認めなかったが (Fig. 6a, b), 脾門部の小血管内に癌浸襲がみられた (Fig. 7)。脾摘出術後4か月に躯幹に多数の皮疹を認め、生検にて食道癌の皮膚

転移と診断され、5か月目に肺炎を併発し死亡した。

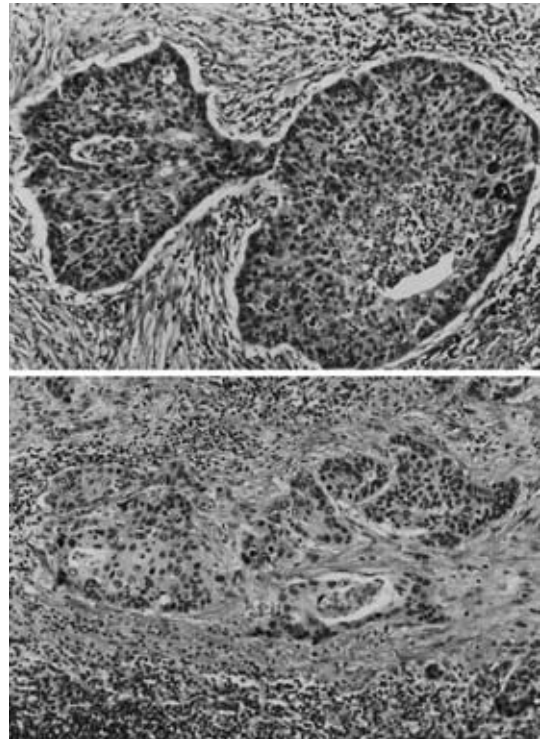
考 察

部検例で検索された全悪性腫瘍の脾臓転移の頻度は Berge¹⁾の7.1%, Warrenら²⁾の0.3~4.8%などの報告があり、原発巣は固形癌としては皮膚、乳腺、卵巣、肺などが多い。消化器癌の脾臓転移率は肝8.3%, 脾4.7%, 大腸4.4%, 胃4.1%, 食道2.4%と特に食道ではまれである¹⁾。本邦においては森ら³⁾の部検例の報告によれば全体の2/3を血液悪性疾患が占め、食道癌からの転移例の報告はみられない。臨床的にも消化器癌症例で経過中に脾臓転移を経験することはまれであり、その理由として、脾臓には輸入リンパ管が存在せず、脾臓の律動的収縮のために癌細胞が停滞しにくく、転移は血行性または播種性とされること²⁾、脾臓内に流入した異物は微小循環内で貪食されてしまうこと⁴⁾、などが

Fig. 5 The cut surface of resected specimen showed white solid tumor with central necrosis.



Fig. 6 a : Microscopic findings of the primary tumor. It showed moderately differentiated squamous cell carcinoma. b : Microscopic findings of the splenic tumor. It showed moderately differentiated squamous cell carcinoma.



a
b

指摘されている。

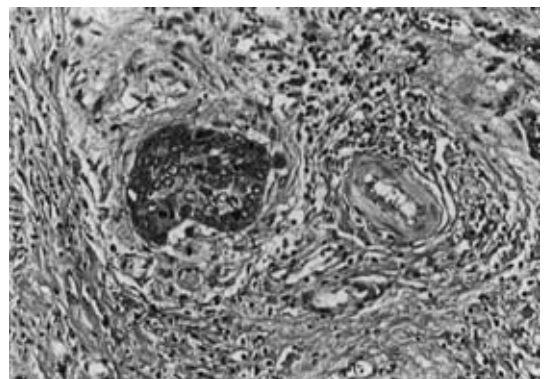
消化器癌の脾臓転移例としては大腸癌⁵⁾、肝細胞癌⁶⁾、胃癌⁷⁾、膵癌⁸⁾からのものの報告が散見されるが、食道癌の脾臓転移例は渉猟しえた限りでは、術後経過観察中に画像診断された1例⁹⁾と、原発巣が腺癌であった1例¹⁰⁾の2例だけであり、いずれも部検で確認されている。欧米の報告も2例¹¹⁾¹²⁾をみるのみであり、自験例のように転移巣を切除し経過をおえた症例の報告はこれまでに1例もない。転移経路については血行性転移を支持する報告が多く¹³⁾、自験例でも脾門部の脂肪組織中の小血管内に癌侵襲を認めたこと、また術後に皮膚転移を生じたことより血行性転移を示唆するものであった。

食道癌における脾臓転移例の予後はこれまでの報告例ばかりでなく⁹⁾¹⁰⁾、自験例でも脾摘出後早期に全身皮膚転移を生じており、きわめて不良と思われる。自験例では高齢のため化学療法は行っていないが、脾臓転移は血行性全身転移の一分症として認識すべきであり、画像上他臓器に転移をみとめず切除しえたとしても化学療法の併用は欠かせぬものとする。

文 献

- 1) Berge T : Splenic metastases. Acta Pathol Microbiol Scand Sect A 82 : 499 506, 1974
- 2) Warren S, Davis AH : Studies on tumor metasta-

Fig. 7 The venous invasion was showed in the fatty tissue of the hilus lienis.



- sis V. The metastases of carcinoma to the spleen. Am J Cancer 21 : 517 533, 1934
- 3) 森 巨, 足立山夫, 岡辺治男ほか: 悪性腫瘍部検例755例の解析 その転移に関する統計的研究 . 癌の臨 9 : 351 374, 1963
- 4) 鈴木 準: ラット脾臓の実験的鼠癩病変からみた脾臓内微小循環, 細胞動態と脾臓各領域の機能 . 日網内系会誌 27 : 263 270, 1987
- 5) 高島茂樹, 後藤田治公, 斎藤人志ほか: 脾臓転移を伴った直腸癌の 1 例 報告例の集計と考察 . 日臨外医会誌 53 : 915 920, 1992
- 6) 山本亮輔, 山本晋一郎, 福嶋啓祐ほか: 脾臓転移を示した肝細胞癌の 2 症例 . 癌の臨 32 : 1486 1490, 1986
- 7) 澤口裕二, 近藤征文, 白戸博志ほか: 胃癌の脾臓転移手術例の検討 . 日消病会誌 87 : 652, 1990
- 8) 志間和徳, 中村典生, 御木高志ほか: 脾臓の脾臓転移により巨大脾腫を来した症例 . 日消外会誌 15 : 1054, 1982
- 9) 中山壽之, 天野定雄, 三宅 洋ほか: 食道癌術後に脾臓転移をきたした 1 例 . 癌の臨 40 : 318 322, 1994
- 10) Sawada H, Watanabe A, Yamada Y et al : Alpha-fetoprotein-producing esophageal adenocarcinoma : report of a case. Surg Today 23 : 1103 1107, 1993
- 11) Murthy SK, Prabhakaran PS, Rao SR et al : Unusual splenic metastasis from oesophageal cancer. Indian J Cancer 28 : 81 83, 1991
- 12) Quint LE, Hepburn LM, Francis IR et al : Incidence and distribution of distant metastases from newly diagnosed esophageal carcinoma. Cancer 76 : 1120 1125, 1995
- 13) 佐藤 勤, 浅沼義博, 鈴木克彦ほか: 転移性脾腫瘍切除の 2 例 . 消外 12 : 1897 1900, 1989

Resection of The Metastatic Spleen-In Case of Esophageal Cancer

Shuzo Hasegawa, Shigemitsu Inada, Tsuyoshi Kotoh,
Nariyoshi Takayama, Kazuya Naritomi, Katsunori Seki,
Kitarou Futami and Sumitaka Arima
Department of Surgery, Fukuoka University, Chikushi Hospital

We report an extremely rare case of metachronous spleen metastasis with esophageal cancer. A 77-year-old man was underwent a subtotal esophagectomy with regional lymph node dissection (D2); Lt, 1p1 + IIb (55 × 47mm) moderately differentiated squamous cell carcinoma, 1y1, v1, ie (+) M0, pN1, pT3, pStage III. During the postoperative follow up, spleen metastasis was revealed using image diagnostic technique(US, CT and MRI) At 14 months after initial surgery, the splenectomy was performed. Subsequently, multiple skin metastasis appeared and he died at 5 months after splenectomy.

Key words : esophageal cancer, splenic metastasis

[Jpn J Gastroenterol Surg 34 : 1587 1590, 2001]

Reprint requests : Shuzo Hasegawa Department of Surgery, Fukuoka University, Chikushi Hospital
377 1 Zokumyoin, Chikushino-city, 818 8502 JAPAN